

から入院を継続しているものが32名である（ちなみに65才以上の高齢者の占める割合は25%であった）。これらの長期在院者は年々高齢化してきており、退院するのはかなり難しく今後とも入院を継続していくものと思われ長期在院者の高齢化はますます加速されていくものと予測される。こうした患者の高齢化は（1）ADLの低下した患者の増加（2）患者の痴呆化（3）身体的合併症の多発といった問題をはらんでいる。以前は元気で手のかからなかつた患者に介助の手が必要になってくるということである。

現在、精神科病棟は第一病棟と第二病棟の二つで構成されており、開放病棟、半開放病棟、閉鎖病棟といった機能分化がなされているが上記のように高齢者の介助などに看護者の人手がとられており、その分他の患者の看護に十分な力が注げていないのが現状のように思われる。こうした高齢

者の看護が大切なことは言うまでもないが、今後、病院から地域への流れをさらに推し進めていくためには、このような現状をより良い方向へ解消していかなければならない。

表 長期在院者の入院患者全体に占める割合

5年以上の長期在院者	63%
10年以上の長期在院者	42%
10年以上の長期在院者の内訳（実数）	
昭和30年代から	
入院を継続しているもの	17名
昭和40年代から	
入院を継続しているもの	13名
昭和50年代から	
入院を継続しているもの	32名

当院における麻酔科の活動

麻酔科医長 南 波 仁

当科は平成4年7月1日に開設され今年で4年目に入りました。常勤医は1名で、平成7年4月より前任の渡邊先生にかわり私が着任致しました。

診療業務としては手術麻酔、ペインクリニックを行なっています。

過去3年間の手術麻酔症例数の変化を図1に示します。平成7年の麻酔科管理手術件数は865件で、その内臨時手術は214件（24%）でした。手術室全体での手術件数が2237件ですので39%が麻酔科管理症例ということになります。手術室全体での手術件数は変化はありませんが、麻酔科管理症例は毎年約150例ずつ増え、麻酔科管理率が年々増加しています。平成6年末より開心術が開始されましたので、全ての手術診療科を網羅し、大学病院にもひけをとらない手術内容となっていました。この様な麻酔科管理手術件数の増加、手

術内容の充実に対し、麻酔科常勤医1名ではそのマンパワーの不足を痛感し大学医局に対し増員を要請していますが、週に2～3日応援医師を派遣して頂いているのが現状です。（なお平成7年10月より笠井先生は臨時職員を辞任され、現在は毎回別に応援医師が派遣されています。）

安全な麻酔をかける上で非常に重要な事と致しまして術前回診があります。前任の渡邊先生は手術の前日の午後に手術室内で行なっていましたが、私はやむをえない場合以外はベッドサイドで行なうことにしました。。これは彼が昨年度の本誌で指摘しているように、麻酔科管理手術症例の増加に伴い、午後は手術麻酔で多忙になったためです。必然的に私の空いている不定の時間に病棟を訪れることになり、検査データ等が揃っていないこともあるかもしれませんが、その都度指示致し

ますので御理解願います。

この様な現状でも大過なくこなせた事は、各科の先生方、手術室並びに病棟スタッフの御協力の賜と感謝すると同時に、今後も手術室運営に一層の御協力をお願いします。手術室運営上の問題点としては、①スタッフのマンパワーの不足、②曜日による混雑の差があげられると思います。①に関しては現在のスタッフは限界まで勤務しており、今以上の手術の充実を望む事は、個人の犠牲的勤務を強いる以外には成り立たないので、一刻も速い増員を望むところです。②に関しては、各科の外来、検査、病棟でのベッド及び看護スタッフの確保、応援医師の派遣日の都合や、必ずしもコンスタントに大手術があるわけではないことから難しい問題ですが、各科の手術日を見直していきたいので御協力をお願いします。

過去3年間のペインクリニック症例の延べ症例数と新患数を図2に示します。当院でのペイン

クリニック外来はまだ開設されていないので、大学及び各科からの紹介患者を対象としており、三叉神経痛、癌性疼痛、術後痛の患者がほとんど占め、ブロックの内容としては星状神経節ブロック、硬膜外ブロック、局所神経ブロック等でした。症例数が減少したのは耳鼻科の突発性難聴、顔面神経麻痺の症例から手を引いたためです。東松先生とも話し合いましたが、これらの疾患には副腎皮質ステロイド大量療法が著効を示しますので、麻酔科常勤医1名で年間麻酔865例という現状では手術麻酔に全力を尽くす事が当科への要望に答えることになるかと判断しました。

麻酔科医の活動分野としましては、他にも救急・集中治療などがありますが、何分一人で行なえる業務には限界がありますので、最も必要とされている手術麻酔に限られるのが現状です。しかし、将来的には人員の増加と共に活動内容の拡充を計りたいと思います。

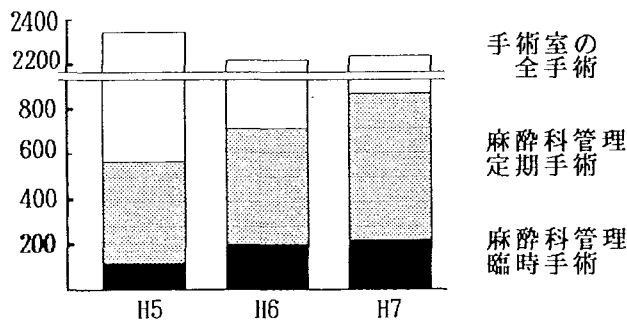


図1 年間手術症例数の推移

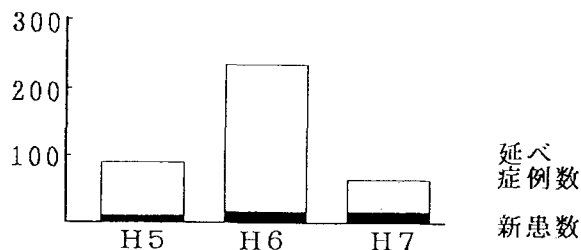


図2 年間ペインクリニック症例数の推移